

| | |
|---------|---|
| 氏名 | 嶋 村 廣 視 |
| 授与した学位 | 博 士 |
| 専攻分野の名称 | 医 学 |
| 学位授与番号 | 博乙第 3552号 |
| 学位授与の日付 | 平成13年3月25日 |
| 学位授与の要件 | 博士の学位論文提出者 (学位規則第4条第2項該当) |
| 学位論文題目 | Autologous Serum Deprivation Restored IL-1 Receptor Antagonist Production by Peripheral Blood Mononuclear Cells in Patients with Gastric Cancer (胃癌患者における血清除去による末梢血単核球のIL-1ra産生能の回復) |
| 論文審査委員 | 教授 中山 睿一 教授 清水 信義 教授 原田 実根 |

学位論文内容の要旨

癌細胞の免疫系による排除には、免疫担当細胞から産生される種々のサイトカインとそのサイトカインカスケードが関与する。また、担癌患者における免疫抑制には、免疫担当細胞の機能不全に加え、血清中に存在する可溶性因子が関与する。今回我々は、それらの可溶性因子が細胞性免疫能に与える影響を、末梢血単核球 (PBMC) のサイトカイン産生能とサイトカインカスケードの面から検討した。全血アッセイと血清を除去したPBMCアッセイを用い、種々のサイトカイン産生能を測定し、その相関関係を解析した。併せ、血清中のsICAM-1を測定した。健常成人に比し、担癌群においてTNF- α 、IFN- γ の産生能は全血アッセイ、PBMCアッセイとも有意に低下していた。一方、IL-1raは全血アッセイでは有意に低値を示していたが、PBMCアッセイでは逆に有意の増加を示した。これらの結果から、担癌血清の除去が担癌状態の免疫不全を部分的に是正する可能性が示唆された。sICAM-1値は担癌群において有意に高く、担癌患者におけるPBMCのサイトカイン産生、並びにそのカスケードに影響を与える免疫抑制因子であることが推定された。

論文審査結果の要旨

本研究は、がん患者血清中に存在する可溶性因子が末梢血単核球のサイトカイン産生能に及ぼす影響を検討したものである。その結果、がん患者血清中には免疫抑制因子が存在し、TNF- α IFN- γ の産生を抑制していることを示唆する成績を得た。この知見は、がん患者における免疫抑制のメカニズムの一つとして血清中の可溶性因子が関与していることを示唆しており、価値ある業績であると認める。よって本研究者は博士 (医学) の学位を得る資格があると認める。